# 二　海軍

## 砲艦勢多艦長・寺崎隆治少佐の証言

昭和十二年、寺崎隆治少佐は海軍大学校の教官をしていた。八月十三日、第二次上海事変が勃発すると、寺崎少佐は教頭の佐藤市郎少将（岸信介、佐藤栄作両首相の長兄）に支那に行かせてくれるように頼み、十月に砲艦勢多の艦長に任命された。

上海方面には長谷川清中将の率いる第三艦隊があり、勢多はその麾下の第十一戦隊に属していた。

――南京に行くまで両岸から相当攻撃がありましたか。

「十二月九日、鎮江の少し下流に中国軍の亀山砲台があり、ここからの砲撃が猛烈で、その三弾が勢多に命中しましたが、死傷者はありませんでした。それでいったん引き下がり、飛行機で砲台を爆撃しました。

亀山砲台が静かになると、今度はその先の都天廟から猛烈な射撃を受け、その後南京までは両岸から砲撃と機銃・小銃射撃を受け、水面下にはたくさんの機雷が敷設され難航しました。



十一日夜鎮江に突入した時、勢多の燃料はほとんどなくなっていましたが、直ちに敵の桟橋に横付けして石炭を満載し、遡江を続けることができました」

――その頃近藤（英次郎少将・第十一戦隊）司令官はどのあたりを進んでいたのですか。

「安宅に乗って艦隊の後方約十マイルにおり、艦隊を指揮していました。

十二日は南京の烏龍山からも対岸の劉子口からも猛烈に撃ってきて、しかも烏龍山の手前には閉塞線ができていました。この閉塞線というのは、十二隻ほどの船をワイヤーでつないで沈めてありましたので、午後十一時、勢多は爆破隊を護衛してワイヤーを爆破切断し、十三日の午前三時に水路を啓開しました。

十三日午前十時、勢多は爆破水路を試航し、その啓開を確認後、保津の後方百メートルを南京に進撃しました。保津の艦長の上田（光造）中佐が私より五クラス先輩でしたので、保津が先頭を進んだ訳です。

南京の手前で揚子江は二手に分かれており、左岸の方を進みましたが、両岸からの中国兵の猛攻撃は続いていました。この頃から、ジャンクや筏に乗った中国兵が流れてきて、どんどん増えてきました。勢多には二十五ミリ機関銃が四門ありましたので、これを撃ちながら進みました」

――中国兵というのは南京から逃げてきた兵隊ですか。

「そうです。陸軍が南京城に入ったのは十三日ですから、揚子江に逃げた中国兵がジャンクや筏などに乗って逃げたものと思います」

——下流から日本軍が遡江してくると考えなかったのでしょうか。

「最初は対岸の浦口に逃げたでしょうが、まもなく浦口にも日本軍が来ましたので、上流か下流に逃げるしか方法はなかったと思います。

南京に近づくにつれてジャンクや筏だけでなく、板や戸などにすがりつく中国兵もあり、そういう中国兵で揚子江がいっぱいになりました。下流から日本艦隊が遡江してくるとは全く考えていなかったようです」

——ジャンクには何人位乗れるものですか。

「百人位だと思います」

——この時、ジャンク、筏などで逃げた中国兵はどの位ですか。

「何千人もいました。勢多は進みながら撃ちましたが、後から来た艦も次々撃ちました。全部で二十隻位いました。タイミングがよかったと思います」

——何時頃南京に着いたのですか。

「十三日の午後三時十五分です。中興碼頭には日本陸軍が来ていまして日の丸を振っていました。南京に着いたら陸軍と連絡せよと司令官から命令されていましたので、中興碼頭に向おうと保津に信号しましたら、先頭の保津がすぐに中興碼頭に向ったので、勢多が先頭になり、さらに先の下関桟橋に向いました。

下関桟橋に近づきますと多くの兵が手を振っているので、双眼鏡で見ますと中国兵なのです。中国兵は日本の軍艦がこんなに早く来るとは思わず、中国の軍艦だと思って手を振



ったのだと思います。そこでまた二十五ミリ機銃で掃射して近づきました」

——どのくらいの中国兵がいましたか。

「五百人くらいで更にその後方にたくさんいました。掃射して近づきましたので、後の方の中国兵は上流に逃げました。

先頭で南京に突入しましたので『われ南京に突入せり一五一五』と電報を打ちました。暗号にしますと三十分もかかりますので平文で打ちました。これは近藤司令官、第三艦隊、軍令部、海軍省も直ちに受け取っています」

——十四日以降は？

「南京進出の前日にパネー号事件（日本軍機による米砲艦誤爆事件）が起きましたので保津などが救援に向い、勢多はそのまま南京に残りました」

——当時の「ニューヨーク・タイムズ」に、勢多が南京に残った外人記者を乗せて、十五日に上海に向う、とありますが……。

「そういうことは全然ありません。私は外人記者と会ったこともありません。十七日の入城式までは南京を離れませんでした」

——同じ「ニューヨーク・タイムズ」に、外人記者が南京から乗船する時、岸壁で、日本兵が捕虜三百人を処刑しているのを見た、とありますが……。

「ずっと下関にいましたが、そういう場面を見たことは全くありません」

——城内の様子はどうだったのですか。

「勢多の先任将校に関口鏃造大尉がおり、これは私の親戚にあたりますが、十四日、城内の視察をやらせました。その時、市内は平穏であるとのことで特別報告は受けていません。あとからも何も言ってきませんでした」

——寺崎さんが城内に入ったのはいつですか。

「勢多はずっと下関にいて、命により対岸の硫安工場を占領しました。

戦闘機のベテラン岡村基晴（少佐）が同期で、南京に来ましたので、下関でローソクをともして祝杯をあげたこともありました。

私がはじめて城内に入ったのは十七日の入城式の時だったと思います。

この時は国民政府の広場に参列して、松井石根大将や長谷川清中将と万歳三唱しました。比良の艦長だった土井申二中佐が隣で、この時、土井さんが作った漢詩をもらいました。

陸軍の案内で紫金山や光華門なども見に行きましたが、死体はありませんでした。死体があったのは揚子江の沿岸だけです。下関と浦口付近だけです」

——揚子江岸の死体は全部でどの位ありましたか。

「四、五千人はあったと思います」

——その死体はどういう死体ですか。

「中国軍が揚子江に逃げる時、海軍が来ましたし、浦口に逃げた時は日本の陸軍が来ていましたからその時の戦死体です」

——この死体が虐殺と言われているものですか。



「虐殺とは戦後の戦争裁判で言われだしたものです。その時は戦争ですから抵抗する中国兵は射殺しましたし、混乱してますから逃げまどっている住民や反抗する市民も多少はいたでしょう。それは戦争の続きです。こういう情況のもとに起こった戦死体を戦後、南京虐殺だと言っているのだと思います。相手は宣伝のベテランですから、白髪三千丈式に取り上げたもので、私が知っているかぎり、あの狭い南京城内で三十万人もの大虐殺は到底できなかったと思っています。

第六師団長の谷寿夫中将が南京で死刑になりましたが、谷中将は国際通で、国際法に詳しい人ですから、それを考えても南京虐殺は間違いだと思います。

あの戦争裁判が終ってからは中国も言わなくなったのですが、戦後四十年を経て、日本からわざわざ行って、南京事件はどうですか、と言って焚きつけるものがあるから、相手も言いだしたものと思います」

——いつまで南京にいました？

「昭和十三年七月まで南京にいま

丹陽付近の江南大運河には、戦禍をさけるためか、ジャンクに乗った市民が右往左往していたという。（昭和12年12月2日）

した。陸軍の人ともよく会いました。上海派遣軍司令官の朝香宮中将に慰問品をいただいています。

昭和十三年正月は鎮江におりました。砲兵旅団長の内山英太郎少将が駐屯されており、互いに往復し、内山少将も何度か勢多に参りました。

当時、上海派遣軍参謀に大西一大尉がいて、陸軍と海軍の連絡参謀をやっていました。その後も南京特務機関長をやっていましたので、大西君が南京のことについては一番詳しいと思います。私が海軍大学の学生の時、大西君は陸軍大学の学生で図上演習をやった仲です。正義感の強い剛直な人間です。お世辞を言わない人間ですが、彼の言うことなら間違いはありません。南京虐殺事件はいろいろ言われていますが、ぜひ真相を解明してほしいものです」

寺崎氏は明治三十三年十一月に生まれ、南京に突入した時は三十七歳であった。遡江作戦の後、第五艦隊参謀として広東・海南島作戦に従事している。大東亜戦争には南遣艦隊参謀として、マレー作戦に従事したのをはじめ、第二航空戦隊参謀、連合艦隊参謀などをつとめた。終戦時は大佐であった。

話をお聞きしたのは昭和六十一年二月で、寺崎氏は八十五歳であったが、戦史の研究、水交会の集まり、特攻隊慰霊顕彰会などのため忙しい日々を送っていた。そのため、わざわざ時間をさいていただいたものである。話をうかがうと、日時がすらすら出てきて、その記憶力には驚くばかりであった。また、中国の耳慣れない地名が出てくると、自らペンをとるといった具合であった。



## 砲艦比良艦長・土井申二中佐の証言

昭和十二年、蘆溝橋事件が起きると、海軍は、第三艦隊が、居留民保護と権益確保のため、上海に向った。また、揚子江で警備にあたっていた第十一戦隊は、重慶、宜昌、沙市、漢口など中国各地にいた居留民の引揚げを行なった。この時、重慶から邦人を乗せて、最後に上海に引揚げたのが比良である。土井申二氏はこの艦長であった。八月一日に重慶を出発し、八月八日に上海に到着した。数日後に漢口から引揚げた五十二人の邦人は南京までしか戻れなかった。間一髪の引揚げだった。

比良が上海に到着した五日後の八月十三日、上海では、海軍陸戦隊が中国軍と衝突し、全面的抗争に入った。

十一月中旬になり、ほぼ上海を掌中にすると、比良をはじめ第十一戦隊は黄浦江の水路啓開を行い、続いて揚子江に向った。

十二月一日、近藤英次郎少将を司令官とし、二十四隻の砲艦、掃海艇などからなる第十一戦隊は揚子江を南京に向けて遡江した。

既に中国は十一月二十八日、揚子江閉鎖を各国に通告していた。要路には閉鎖船を沈め、機雷を敷設し、揚子江は完全に閉鎖されていた。しかも、揚子江岸には江陰、鎮江、烏龍

山などの要塞がある。第十一戦隊はこのような揚子江を南京に向った。

土井申二氏から南京の話をうかがったのは昭和六十一年一月で、土井氏は八十九歳を数えていた。体は、どこが悪いということもなく、好きな漢詩をつくって毎日を送っている。海軍兵学校出身者による水交会の集いがあれば出向くほど元気である。

土井氏の部屋には、若い海軍時代の写真、軍艦旗、天皇・皇后両陛下の写真などが飾られ、海軍に関する書籍、資料などが所狭しと並べてある。これらに囲まれて生活をしているので、当時のことはいろいろと記憶しているが、遠い昔のことでもあり、必ずしも定かでない。

土井氏は明治二十九年生れ、海兵四十五期。中尉、大尉時代は支那警備にあたり、昭和十二年一月、比良艦長となった。主に長沙、宜昌、重慶などで邦人の警備にあたり、その後、南京攻略戦に参加した。昭和十三年二月に短期現役兵の教官として東京に戻ったが、昭和十四年には嵯峨艦長として再び中国に行き、南支作戦に従事した。

『旧海軍中国関係者列伝』という小冊子がある。支那駐在武官補佐官などをつとめ、海軍の支那通であった沖野亦男氏がまとめたもので、これによれば、土井氏は支那を愛した海軍の支那関係者であり、また、土井氏を、「長江勤務五年、南・中支の風光に接し詩情を燃やされた跡美はし」と紹介している。

終戦時には大佐であった。



——揚子江を遡江して南京に向うのですね？

「そうです。十一月十日頃から黄浦江の啓開作業をやり、その後、揚子江を遡上しました。十二月一日頃かと思います。途中、江陰には上陸もしました。その後、鎮江に進み、ここで比良は天谷旅団の渡河作戦を掩護することになり、数日とどまりました。保津や勢多などはそのまま遡江しました」

——勢多などが南京に突入した十三日、比良は鎮江にいたのですか。

「日にちがはっきりしませんが、勢多などが南京に行った頃はまだ鎮江にいたと思います。比良が南京に着いたのは、入城式の前日か前々日頃です」

——下関に着いたのですね？

「いえ。もっと下流の中興碼頭です。下関なのかもしれませんが、下関とは言わずに、中興碼頭と呼んでいました。勢多などは上流の下関に着いたと思います」

——中興碼頭の様子はどうでした？

「そのあたりは宝塔橋街といい、中国軍の軍需物資の基地だったところです。軍需物資がたくさんあり、そのための引込線もありました。

難民が保国寺に六、七千人ほどいました」

——宝塔橋街には海軍しかいなかったのですか。

「いいえ。多くはありませんでしたが、既に陸軍がいました」

——宝塔橋街に死体はありましたか。

「陸軍が入った時、戦があったと思いますから戦死体はありました。また、盗みに入った者を射殺した、と言ってましたが、そういう死体が十数体ありました」

――十七日の入城式は？

「入城式には私も参加しました」

――その時の南京の様子はどうでした？

「城内はおおむねきれいになっていました」

――下関一帯には死体があったと言われていますが……。

「入城式に参列する時、下関から挹江門に向ったと思いますが、門の近くには死体が五、六体ありました。

入城式の時、近藤英次郎司令官に、宝塔橋街の整備、治安などが必要だと述べ、許可になりましたので、二十六日に中興碼頭に戻り、宝塔橋街の整備にあたりました」

――宝塔橋街にはいつまでいましたか。

「二十八日、烏龍山沖で沈没した第一号掃海艇を助けるため出発するまでいました。

この間、街の整備や橋梁の復旧などをしました。紅卍字会の陳漢森が、難民収容所の主任をしていて中心的存在だったので、彼を中心に埋葬なども行ないました。

難民を自分の家に帰すようにしましたが、われわれがいる間に街も落着いてきましたので、陳漢森に命じて、宝塔橋街を平和街と改称させました」

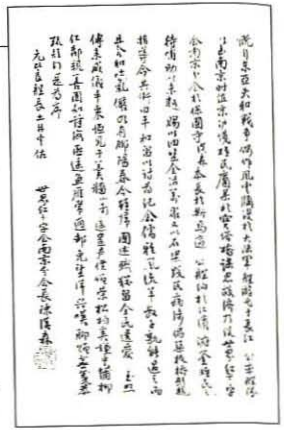
――陳漢森は、紅卍字会でどのような地位にいた人ですか。



## ●陳 漢森より土井中佐への礼状

東アジアにおいて、戦火を交える時より、戦争の風雲が大陸に覆われており、軍艦が揚子江を遊弋している現今のご時世の中、閣下は艦隊を率いて南京に到着されました。この時期に当たり、南京、上海の難民が大勢集まってまいりました。これら難民救済のために、世界紅卍字南京分会が保国寺に設立されて、私は恥ずかしながら、その責任者に任ぜられました。閣下の軍艦は江浜府に停泊する際、閣下は民衆が飢えている状況を察され、小麦粉と食用油を賜り、大勢の民衆の命をお助けになりました。また、道路の整備と橋掛けを命ぜられ、且つ自らご指導に当たられました。そして、その町名を平和と名づけられたと同時に、詩を詠じ、それを以って記念とされました。詩意は和やかで、まるで陽春を迎えたかのごとく感ぜられます。現在、閣下は間もなく帰国され、職務報告をされるが、なおご自身の写真を私どもにお贈りになりました。お写真を壁に掲げて、いつも御威容を拝見致しますと同時に、近隣である日中両国の親善を祈願したいと存じております。もとより日中両国を隔てる海はそれほど広からず、魚や雁などはいつも往来しているにもかかわらず、残念ながら、私は海を越えて、お伺いすることができず、海を眺めて嘆くしかありません。そこで、この粗末な文を贈り、記念とさせていただきます。

元比良艦長土井中佐
　　世界紅卍字会南京分会長　陳　漢森



▲上は土井中佐への礼状の原文。陳漢森の名前と押印がある。左はその和訳。

「社長というか、所有者です。世界紅卍字会南京分会長と言ってました。
第一号掃海艇の負傷者を乗せて上海に戻った時、私は第三艦隊司令部に行き、人道上、宝塔橋街をそのままにすることができない、と言いました。すると、長谷川清司令長官は、宝塔橋街でやったことを非常に喜び、医療品や食糧を下さいました。そこですぐに戻り、昭和十三年の元旦には再び中興碼頭に着きましたが、その時、市民も陳漢森も喜び、爆竹まで鳴らして歓迎してくれました。翌日、陳漢森はわざわざ礼状を持ってきました。
平和街が落ち着いた頃、比良は蕪湖の警備を命ぜられましたので中興碼頭を離れました。陳漢森はその後もわざわざ礼状をくれまして、終戦まで手紙のやりとりをしました。よっぽど感謝したものと思います」
土井氏の手元には、今でも陳漢森からの手紙、感謝状、領収書などがある。また、陳漢森がおくってくれた畳一枚ほどの書は、表装して部屋に飾ってある。
――南京では虐殺があったと言われていますが……。
「虐殺というようなことはなかったと思います。戦場ですから死体はありましたが、虐殺の死体というのは見たことがありません。私が支那人からもらった礼状もそうですが、支那人は誇張して表現します。南京事件とはそういうものかと思います」
以上が土井氏の証言である。
この証言の発表にあたって、土井氏に証言内容を確認してもらおうと思い原稿を送った。ところが御家族から連絡があり、私が会って一カ月もしないうちに突然亡くなられたとのことである。お会いした時は誠に元気だっただけに、本当に残念である。



## 上海海軍武官府報道担当・重村実大尉の証言

重村実大尉は前年の昭和十一年夏から駆逐艦文月の砲術長、続いて軽巡天竜分隊長として上海、青島方面の警備任務についていた。そして重巡三隈分隊長としていったん内地勤務に変ったが、昭和十二年七月八日、蘆溝橋事件の翌日、上海海軍武官府勤務に変わった。軍令部出仕兼部員、第三艦隊司令部付（上海駐在）というのが正式の辞令であった。
着任して武官府の二階に一室を与えられ住みつくことになったが、上海市内では種々の流言飛語が横行し、人心恟々という有様であった。中国の保安隊の警備地区にも正規軍の姿が隠見するようになり、共同租界周辺に公然と土嚢陣地が作られるようになる。やがて、揚子江上流の邦人引揚げが実施され、各地から引揚者が上海に上陸してくる。武官府にも各地から引揚げてきた武官が顔を見せるようになり、その中に混って、内地から国際法の信夫淳平博士などが艦隊司令部の要請で来て、数日間逗留されるという慌ただしさであった。
八月九日午後淞滬（しょうこ）警備司令部の陳副官から、
「何か事件が起きたらしい」
という電話で、沖野補佐官と陳副官と共に現場に急行した。そして、共同租界エキステ

ンション路上で、機関銃の銃撃で斃されている大山（勇夫）中尉の死体を確認した。いわゆる大山事件である。

重村大尉は同夜遺体の検屍、収容に赴く陸戦隊の一行を案内する時、内外の新聞記者・通信員を同行し、これを契機に以後、報道担当として任務にあたることになった。まだ海軍省でも報道部という名称はなく、軍事普及部といっていた頃である。

大山中尉、斉藤（与蔵）一等水兵の葬儀が行なわれた翌十三日から上海は戦場になった。十四日には中国側の攻撃は一段と活発化し、その日帰って見ると武官府は砲撃で焼け落ちていた。武官府は租界内に移り、重村大尉は租界内のピアスアパートに寝泊りすることになった。

――いつ南京に行きましたか。

「十二月十七日、楊樹浦から飛行機で行きました。本田（忠雄少将）武官と一緒だったと思います」

――入城式のため行ったのですか。

「そうです。南京では私も並びまして、松井（石根）大将や長谷川中将を迎えました」

――南京にはいつまでいましたか。

「その日のうちに飛行機で帰りました。ですから慰霊祭には出席してません」

――南京の様子はどうでした？



「私の見た範囲では変ったことはありませんでした。城外の飛行場から入城式の現場まで車で行きましたが、途中、死体は見かけませんでした。城内は整備されたのでしょうか、きれいでした」

――南京で特別印象に残ったことは？

「目についたのは、飛行場近くの城外でしたが、支那人が民家に入って盗みをしていくことです。手あたり次第盗っているようで、中には便器まで運んでいる中国人もいたのには驚きました。一緒にいた人が、宋美齢（蔣介石夫人）の便器だろう、と言ったくらいです」

――南京で日本兵が残虐行為をやったと言われてますが……。

「それはどうでしょうか。私は一日しかいませんが見てません」

――噂話に聞いてませんか。

「南京では中国兵の脱いだ軍服が多かった、ということは聞きました。敗残兵が市民の中に紛れこんだということですね。そのため、便衣隊をひっぱりだして、やったという話はあとで聞きました。この時、兵隊なのか市民なのか、それは中国人に指摘させたということです。中には指摘された者の家族が、うちの人は兵隊でない、ということもあったそうです。また、新聞記者から聞いた話ですが、新聞社で使っていた中国人が連れていかれたので、憲兵隊にそのことを言って、危うく助けてもらったということです。いいかげんに連れていったことがあったようです。

まだ上海にいた時のことですが、一度こういうことがありました。陸軍の兵隊が支那人

をつかまえてましたので、どうするんだと聞くと、怪しかったらやりますと答えてました。どうして怪しいのがわかるのか、と聞くと、面構えでわかると言ってました。

第一次上海事変の時、私は陸戦隊の小隊長をやってまして、捕まえた中国人を両手を上げさせて検査したことがあります。冬でしたので中国人は厚い中国服を着ていましたが、手を下したとたん、中国服からピストルがころげ落ちました。第一次上海事変の頃からそういう中国人が多かったので、第二次上海事変の時は苦労したようです」

――新聞記者から南京でのことで質問などありませんでしたか。

「質問された覚えはありません」

――記者の中には、日本兵の残虐行為があったと言う人もいます。朝日新聞の今井記者です。

「今井記者とは今井正剛君のことでしょうか。彼は名文家でよく知ってます。しかし、今井君からそういう話は聞いた記憶がありません。今井君は東京から上海に来た人で、上海では度々会ってました。朝日一の文筆家でね、昭和二十二年か二十三年の元日の新聞で、日本の最北端と最南端を記事にすることになった時、その記事を書く一人に選ばれました。その頃の最南端が屋久島の方だったので彼は屋久島のことを書きました。この時、屋久島はいい所で魚もとれるというので、朝日をやめてそれを商売にしたところ、失敗してます。しばらくして、兵庫県の阪本勝知事の時に広報課長をやってました。兵庫時代も兵庫県の様々なことを書いてますが、すばらしい文ですよ。戦後も親しくしてましたが、彼から虐



殺の話を聞いたことはありません」

――朝日新聞ではほかにどのような人と?

「今井君と一緒に中村正吾君がいました。きりっとしたいい男でね。中村君も今井君も南京の入城式の時会っています。彼もずっと上海にいて、第十軍が杭州湾に上陸するというので、その方に行き、そのまま第十軍について南京に行ってます。

朝日は白川威海さんが支局長で、森山喬さん、斉藤寅郎君などがいて、各社の上海支局の中じゃ一番スタッフも多く車も持っていてがっちりしていました。

当時、毎日には林謙一記者がいまして、ある時、彼が、中国の反日映画を見に行きたいと言いましてね。林君はつき合いが広いので、たぶん、情報部が大使館の人でなく彼に頼んだらしく、それで二人でガーデンブリッジの向うの映画館に見に行きました。その頃、ガーデンブリッジの向うの映画館はよくそういうのをやってましたのでね。

映画館は異様な雰囲気で、スクリーンに「殺」という文字が映し出され、これがだんだん大きくなる。また、われわれから見ると日本人じゃない日本人が中国人の首をスパッと斬る。そういう映画でした。もちろん記録映画じゃありません。当時、こういう映画が作られ反日を煽ってましたが、戦後はこの類の写真が日本軍の残虐行為の証拠として使われているのが多かったと思います。

読売は名前を大東亜支局といってたと思いますが、名前と違って支局は田中（幸利）君一人で、戦火が上海に及んでから原四郎君、古田徳二郎君などが増派されたようです。

同盟は松本（重治）さんが支社長で、坂田二郎君、堀口瑞典君、殿木圭一君、前田雄二君などがいました。坂田君は海軍の記者クラブの黒潮会で来てましてね、戦後、坂田君が書いた本には南京で虐殺があったとありますが、彼は正義の士ですし、悲憤慷慨するタイプだから、当時知っていたら言うはずなのだが、彼から聞いたことはありません。

松本さんは当時のことを『上海時代』に書いておられますが、報道に従事する人として、事実と感情とをよく書いていると思います」

――『上海時代』の中には、松井大将が慰霊祭で叱ったとありますが……。

「ええ。私は上海に戻ってきましたが、あとで、慰霊祭の時、松井大将が訓示をしたということは聞いてました」

――どなたからお聞きになったのですか。

「誰から聞いたか、そのことは皆知っていたと思います。その時、松井大将が叱る位だから日本軍は相当ひどかったんじゃないかと思いました。松井大将は、支那人をかわいがらなくてはいけないと言っていた人ですから、自分が一番嫌がったことを軍はやったのです」

――相当ひどいこととはどんなことと考えてました？

「便衣隊の話を聞いていましたから、便衣隊をやったんだなと思いました。相当というくらいですから、何百人も」

――何万人とかいわれてますが……。

「戦後は何万人とかいわれてますが、何万人ということでしたら、相当どころじゃないですよ。相当以上になります。そのころ考えていたことは、戦後いわれているようなこととは全然違ってました。また、戦後いわれていることに、海軍が下関で機銃掃射したこともあります。それは戦いですし、その数はたかが知れてると思います」



――松井大将とお会いになったことは？

「上海にいた時一度あります。大言壮語するタイプの方ではないと思います」

――松井大将の気持が下まで伝わらなかったのでしょうか。

「軍が一概にやりすぎとは言えないと思います。戦地にいた人の気持は、その人でないとわからないものです。例えば、こんなことがあります。第一次上海事変の時のことです。私の小隊にいた大変勇敢な下士官が、戦が終わって引続き警備をしている時、部下が怪我をしたので、手術に立会せますと、青い顔をして震えていました。

あの頃の海軍は志願兵も多く訓練もよくやり、少人数で上の命令がよく行き届いて、いわゆるプロです。しかし、陸軍はそうはゆきません。召集兵が大部分で、数が数ですし、広い地域にわたるので、命令が行き届かないこともあるでしょうし、地がそのまま出ます。陸軍は日本人そのものです。あれが日本人なのでしょう」

――その頃、陸軍の長勇参謀のことをお聞きになってますか。

「私は会ったことはありませんでしたが、噂では聞いてました。塙団右衛門のような、講談に出てくるような人という噂でした」

――外人記者からの南京のことで質問などありませんでしたか。

「大山大尉事件の時、現場に外人記者を連れていきますと、日本軍のやらせでないとわかって好評でした。このため、武官室に外人記者専任を置くことになり、海軍機関学校三十一期の磯部太郎さんが赴任してきました。彼とは同じピアスアパートに住み、夕食は特別なことがないかぎり毎日一緒にとりますから、その時いろいろ雑談をしてましたが、彼が外人記者から南京について質問されたという話は一度も聞いたことがありませんでした。あったら毎日の雑談ですから、言うと思います」

――ヒューゲッセン英国大使誤射事件やパネー号事件が起こってますが、その時は？

「そういう大きい問題は、本田武官や第三艦隊がやっていました」

――いつまで上海に？

「十三年の三月、内地に転勤になるまでです」

以上が重村大尉の証言である。

最初、インタビューを申込んだ時、断わられた。自分の見た範囲では、南京で変わったことがなかったので、お役に立つことはないから、とのことであった。しかし、当時、南京の情報は上海を通して日本へ、世界へ流れていた。上海にある海軍報道部にも南京の情報が入ったと思われる。海軍に入った南京の情報というのはどんなものだったのか。もしかすると陸軍とは違うものかもしれない。そう思って改めて申し込み、三度目に了承してもらった。昭和六十年暮のことである。

戦後、ニッポン放送、山口放送、ラジオ関東など放送界で活躍している。



## 第二連合航空隊参謀・源田実少佐の証言

当時第二連合航空隊の参謀だった源田実少佐は、昭和十六年には第一航空艦隊の参謀として真珠湾攻撃に参加し、また、昭和二十年には紫電改を率いてB―29を迎撃した三四三空（松山）の司令として知られている。

戦後は航空自衛隊の航空幕僚長のあと、昭和三十七年から昭和六十一年まで参議院議員をつとめた。

この話は、参議院議員会館の源田氏の部屋でお聞きしたものである。

十二月三日には前線基地を常州に進め、さらに陸軍の南京城攻撃に呼応して南京爆撃を行なった。第二連合航空隊は連日、南京攻撃に向ったが、十二月十二日、第二連合航空隊麾下（きか）の第十三航空隊は揚子江でアメリカ砲艦パネー号を誤爆した。

――前進基地を常州に移した時、源田さんも常州にいらっしゃいましたか。

「私は公大基地にいまして、常州には要件のある時だけ行きました。三竝（みつなみ）（貞三少将）司令官も公大基地に残りました」

――南京の上流でパネー号事件が起きますが……。

「この事件は航空隊がパネー号を中国の軍艦だと思ったために攻撃したもので、故意に攻撃したものではありません。

まさかあそこにアメリカの砲艦がいるとはねえ。南京は戦場ですからね。アメリカもあいうところでなく、もっと上流に避難するとかいくらでも方法はあったと思います。南京に残っていたのは半分嫌がらせがあると思います。

実際にパネー号を攻撃したのは、あだ名をぶつといった村田重治大尉です。彼は真珠湾攻撃の時の雷撃隊指揮官でもあったが、立派な人でした」

——その時、パネー号が揚子江にいることを第二連合航空隊は知っていましたか。

「たぶん、知っていたと思います」

——外交問題になって大変でしたね。

「それは大騒ぎになりました。そのため三竝司令官も戒告を受けました」

——事件調査のため陸軍の方から西義章中佐が行きましたが、海軍はどなたがいらっしゃいましたか。

「特別なかったと思います」

——翌日南京が陥落しますが、航空隊はどうしましたか。

「航空隊の方は戦争が続いており、そのまま常州にいて、一週間ほどしてから基地を南京の飛行場に移しました。私も飛行機を操縦して南京に行きました」

——入城式に参加しましたか。

「私はセレモニーには参加しませんでした。南京に行ったのは入城式の後でした」

——南京市内の様子はどうでした?



「飛行場のそばに司令部をもうけ、私は飛行場と司令部の往復だけでしたので市街地はほとんど知りません。また、南京に移ってからはすぐ南昌、漢口への爆撃が行われましたから、その作戦に忙殺されてました」

——南京には上海派遣軍や、海軍の砲艦が来てますが、お会いになったことは?

「航空隊は航空に関することだけにしか関係してませんでしたから、航空以外の人とは会ったことはありません」

——この頃、南京虐殺があったと言われていますが……。

「知りません。そういう武士道に反することは海軍に関する限りありません」

——噂で聞いたことは?

「全然ありません」

——陸軍ではあったと言う人もいますが……。

「陸軍のことはよくわかりません。一般論ですが、その頃南京というと、日本人には南京事件といって昭和二年に南京の日本領事館が略奪された事件が頭にありました。また、中国人と戦ってましたから敵愾心は強かったと思います。私もその頃、中国人をチャンコロと言ってました。そういう土壌はありました。

しかし、海軍では、捕虜を殺したり、抵抗のできないものを殺すことはいけない、もしあれば厳重に処罰する、と言ってます。真珠湾攻撃の時、市街地も攻撃しましょうと言うものがいたので、絶対だめだと言ったことがあります。

また、真珠湾攻撃のあと、第一航空艦隊は印度洋の英国艦隊を攻撃し、セイロン島の東岸で空母ハーミスを撃沈させました。その時、赤城の近くに敵兵がいたので引揚げたことがあります。戦場では海にいる一人を助けるというのは時間もかかり大変なことです。それでもとにかく助けました。すると兵隊の中に、気が立っていて殴りかかろうとする者がいるので、いじめることはならん、と厳命して私が直接この兵を訊問することにしました。よく調べると、この兵隊はカナダの兵で、最初は何も食べず困りましたが、そのうちライスカレーは食べるようになりました。兵隊の中にはこの時のように殴ろうという気持の者もいましたが、海軍ではいつも捕虜に対してははっきりしていました」

――いつまで南京にいましたか。

「第二連合航空隊はしばらく南京を基地にしていましたが、私は横須賀航空隊飛行隊長を命ぜられましたので、一月に入ってから日本に戻りました。その時は南京から飛行機を操縦して帰りました。南京には三週間位いたことになります」

――基地の周りはどうでした?

「飛行場の近くの市街地は特別破壊がなかったと思います。普通のとおりで、昭和十三年の正月は南京で静かに迎えました」

以上が源田実少佐の証言である。

# 第三章 画家・写真家の見た南京

……この時取り残された中国兵は後で日本軍を襲ったりしてます。……また、南京から揚子江を渡って逃げた中国兵は四月の徐州作戦には再び日本軍と戦っています。ですから日本軍としては中国兵を殲滅しなければなりません。それが戦争ですし、そうしないと今度は日本軍がやられてしまいます。そういう全体をわからなければ一部分をとりあげても間違いになります。南京虐殺と言われるのもそういうものです。

（海軍従軍絵画通信員・住谷磐根氏の証言より）

道路沿いで自家農園でとれたものを売っている市民もいた。（昭和12年12月15日）